

玄中寺 双塔寺 崇善寺 天龍山石窟 晋祠

玄中寺: 中国の浄土教の発祥の地。この寺は今から1,500年以上前、北魏の高僧・曇鸞(どんらん)大師(476~542)によって、孝文帝の延興2年(472)から 承明元年(476)にかけての建立。中国浄土教の古刹です。曇鸞はここで浄土教の教学と実践を行い、隋末の道綽(どうしゃく)禪師(562~645)、さらに善導(ぜんどう)大師(617~681)と教えが引き継がれ、涅槃・浄土の教えが広まった。天親菩薩・曇鸞大師の親と鸞をいただき親鸞と名付けた。日本にとって大変重要なことは、法然上人が '万民救済' の道を求めて悩んでいる時に、善導大師が書かれた『観経疏(かんぎょうしょ)』を読んで忽然として悟り、日本に初めて浄土宗を開創して、自らを罪深い凡夫と自覚している人々が、人の思惑や力を遥かに越えた"他力・仏"により、見守られ生かされている有り難さを感謝する生き方を示したからです。自らを罪深い凡人と自覚する人の多くは、政治・権力者ではなく、一般庶民でした。庶民の眼覚めにより、日本の文化環境は、大きく変わり始めました。

親鸞が師とした、七高層の内三祖、曇鸞・道綽・善導大師が関った玄中寺である。

曇鸞大師【どんらんだいし】(476~542)

中国北部、五台山の近く雁門の生まれ。はじめ、仏教研究を続けるためには先ず、長生きをしなければいけない、ということで仙術に親しんでいたが、北インドから来た訳経僧・菩提流支に会って、「少々長生きして何になる。すみやかに生死解脱の法を求めよ。 限りない生命を得る、真の不死の書はこれだ。」と『観無量寿経』を示され浄土教に帰依した。以降、天親の『浄土論』を解説した『浄土論註』を著す一方、中国の民衆に称名念仏の素晴らしさを説いた。

道綽禪師【どうしゃくぜんじ】(562~645)

曇鸞大師没後20年、太原の近くで生まれた。少年時代、北周の武帝は仏法をきらい、仏教徒を迫害したが、やがて随の世となり、再び仏法が興隆すると、彼の温厚で 礼儀正しい人柄は、深い学識とあいまって、多くの人びとから慕われた。たまたま立ち寄った玄中寺で、曇鸞大師の碑文を目にし、大師が仙経を焼き捨てて浄土の教えに帰したことに強い衝撃を受けた。「釈尊が入滅してすでに千五百年、末法の今日、いかにして正しいさとりを完成させる修行ができようか。私も聖道(しょうどう)自力の道を投げ捨てて、浄土の他力の教えに帰依しよう。」と、それまで属していた涅槃集を離れ、玄中寺に移り住んで、念仏生活に入った。禪師の教化により、念仏は一般の老幼にまで及び、国中に広まった。『安楽集』を著す。

善導大師【ぜんどうだいし】(617~681)

泗州の生まれ。幼くして出家、三論宗に入り、『維摩経』や『法華経』を学んだ。しかし、末法の世にかなった法を求めるなかで、玄中寺の道綽禪師に会い、弟子となる。

その後、善導は唐の都・長安(現在の西安)に入り、光明寺に住んで、広く大衆に門戸を開き、念仏をもっぱら勧めた。群参するもの限りなく、「長安城中、念仏に満つ」といわれるほどであった。『観経疏(かんぎょうしょ)』を著わし、これまでの『仏説観無量寿経』についての解釈を改め、念仏往生こそ末法悪世の人々のための仏の本意であることを明らかにした。後に法然上人は万民救済の道を求めて悩んでいるときに、この『観経疏』を読んで、忽然として悟るのである。

玄中寺は国道307号線を南西に70km、更に3kmほど入った、山あいの奥深いところにある。中国浄土宗の三祖、曇鸞・道綽・善導大師の祖山で、日本の浄土宗・浄土真宗の祖庭になっている。その教えを善導の弟子が西安の香積寺で広め、それが遣唐使を経て日本に伝わり、法然・親鸞が浄土宗・浄土真宗を興すことになった。

しかしその後玄中寺は、長い間に興亡を繰り返し、清代には千仏殿を残して焼失し、その存在はいつの間にか忘れ去られてしまった。再発見されたのが1920年、日本の僧侶常磐大定によってであった。玄中寺を探し求めていた常磐大定は、唐代に書かれた石碑を発見して、ここが玄中寺であるとの確証をつかんだ。その後、浄土宗・浄土真宗ともここを玄中寺と認め、法要を営み、中日の交流が始まった。今でも毎年多くの信者がここを訪ねている。石壁万丈といわれる石壁山中の聖境にあります。東側の丘には、玄中寺のシンボリックな存在で宋代建立の八角白色「秋容塔」があります。日本人の遺骨が安置されている処

玄中寺と日本との交流は深い。浄土信仰の源泉をたずねてこの地の寺院を再興するにも日本からの尽力があったのだが、さらにはもっと歴史的に意義の深い交流がなされている。

日中戦争、中国から多数の人が日本に連行されて強制労働に従事させられ、多くの病死者、事故死者を出したことは、日本の戦争責任を考える上で忘れてはならないことである。戦後、その反省に立って、**大谷瑩潤(えいじゅん)氏** 1953年(昭和28年)には、真宗大谷派の他の僧侶らと「中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会」を設立。会長として日中戦争で日本に連行され現地で没した中国側捕虜の遺骨の送還をすすめた。

これはもちろん人道的な行為であるのだが、当時の冷戦の中では大変に勇気のいることであった。玄中寺における日本と中国の宗教者が培ってきた信頼関係は、その事業において大きな推進力を生み、**遺骨の返還**が進められたのである。そしてそのことは、新たな信頼関係の発展にもつながり、今日に至る玄中寺を舞台とした日中の友好が続いている。

大谷瑩潤(えいじゅん)氏の顕彰碑がある。2000年(平成12年)5月にはこの事績を顕彰する石碑が山西省交城県の玄中寺境内に建立されている。

若い、仏画氏4名面談・20代の女性3名と男性1名 住職面談30分



玄中寺入り口の山門



お寺の入り口お爺さんが監視。



何故か、ガラスケース内の布袋様



玄中寺の全体図



大きな鐘楼



鼓楼



雲版(うんぱん)魚柳(ぎょりゅう)を鳴らし食事の時を知らせます



大谷瑩潤(えいじゅん)の顕彰之木碑



大雄宝殿



雄宝殿の本尊・阿弥陀如来立像。



本尊の前の聖少女にも似た白玉仏



千仏閣の山号額



本堂には佛光普照像と千の佛



部屋全体が仏像



日本人の位牌



大谷瑩潤様の位牌も在りました



大谷瑩潤様の写真



日本の出版物



主な方の写真がガラスのケースの中



日本から寄贈の善導・雲鸞・道綽の軸と像



数年かけての作業との事



20歳代の仏画士4名



彼女らの書いた仏画



善導像



雲鸞像



村里はなれた山奥の寺



広大な敷地に幾つかの伽藍



山頂の伽藍 千仏殿



広い境内

双塔寺：僧侶居ない寺。双塔は双塔禅寺内にあり、寺は唐時代に民間の寄付で建造されたという。双塔は北宋の太平7年（西暦982年）、王兄弟により建立された。東の塔は舍利塔、西の塔は功德塔と称され、俗に双塔と呼ばれてきた2つの塔は八面七層の塔で、東の塔は高さ33.85m、西の塔は34.24mで、補修の際に生じた39cmほどの高度さがあるが、肉眼では区別がつかない。双塔の北には宋時代の羅漢堂正殿の旧址があり、彫刻を施した円形、八角形などの石柱、石羅漢の残像のみが横たわり、歴史の流れを感じさせる。17世紀の初めに、明の高僧・佛登奉敕によって建てられました。（明代の創建）宣文塔、文峰塔と名付けられた二つの塔は太原のシンボルである。明代の万暦36年（1608年）、万暦皇帝の母宣文皇后の出家により五大山の高僧福登が創建したと伝えられている。二つの塔があることからこの寺は双塔寺と呼ばれている。五大山の高僧福登により創建当初は永明寺と呼ばれたが、その後、永遠に福をもたらすようにとの意味がこめられた永祚寺に改称された。

牡丹の名所で400年前、明代から続いています。



立派な石碑



階段を登れば立派な山門



双塔



立派な参道



参道を登れば広い境内に双塔



大きな羅漢堂正殿



本堂には色々場所区別しています



中央に大雄殿



大雄殿には釈迦像



大雄殿には鐘が置いています



大雄殿には太鼓も置いています



頂上からの太原市内

崇善寺（すうぜんじ）：唐代に創建された当時は白馬寺と言われていたが、明代に崇善寺と改められた。明の太祖朱元璋の第三子が母親の皇后を供養するために作った寺で、当時は南北550m、東西250m、大雄宝殿は間口柱間9間、高さ30mの壮大な寺院であったが、清代に焼失。現存するのは、山門・鐘楼・大悲殿のみで、明代の80分の1の規模になっている。大悲殿内の千手千顔十一面観音・千鉢文殊菩薩・

普賢菩薩は、必見の価値がある。現在では山西省仏教教会が置かれている。



立派な石碑



町の中の寺 山門



大きな鐘楼



大きな鼓楼



大きな大悲殿



ご本尊は千手千顔十一面観音



千鉢文殊菩薩



佛光普照



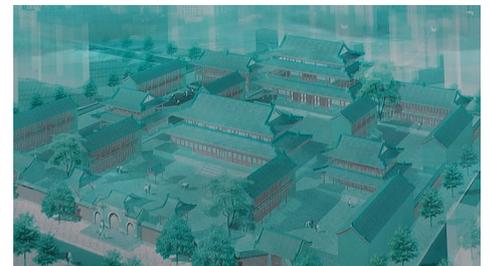
境内には鐘楼



境内には鼓楼



魚槎（ぎょほう）と鐘



崇善寺の全景

天龍山石窟：太原市の南西 40 キロの山中にあり、別名は方山と言い海拔 1700メートルある、北齊皇帝高洋の父高歡の避暑宮のあったところと伝えられている。東魏（534～550年）年代に開鑿が開始され、東西両峰の断崖腰部に東魏、北齊、隋、唐代に開鑿した合計 24 窟もの洞窟が残されている。この石窟は荒らされ完全なものはほとんどない。切り取られた石仏は日本、アメリカ、スイスなどの美術館等に陳列されている。石窟は東西両峰にあり、唐代の代表作としては、西峰第 9 窟にある弥勒大仏が挙げられる。東魏・北宋代の代表作としては、第 2 窟・第 10 窟の菩薩が注目を集めている。山を下りながらの見学です。山の上なので景色はよいのですが石窟はというと、ほとんど顔がなかったり風化してしまったりで見るものは余りありません。しかも一番大きな仏像の入り口は鍵がかかっていて入れません。どうして、偉大な文化遺産が、どうしてこんなにまで惨めな姿になってしまったのだろうか、残念でならない。アヘン戦争以来、中国の国力は衰亡の一途をたどり、20 世紀のはじめ、清国の滅亡、中華民国建国の頃から、中国数千年の文化遺産は列強の古美術収集者の草刈場になってしまった。中国石窟仏も、同じく盗鑿による破壊が幅広く行われた。龍門石窟は、その 80～90%の石仏が頭から切り取られているといわれるし、天龍山石窟に至っては、ほぼ完璧なまでに盗鑿し尽くされているという。

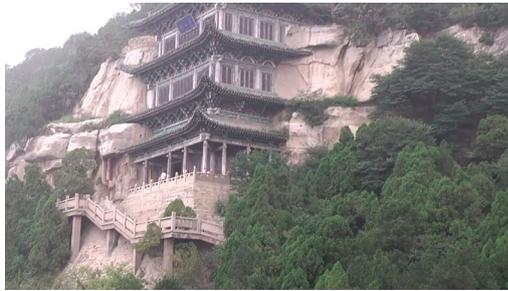
雲岡・鞏県石窟のほうが、まだ少しはましというところだろうか。

石窟の下にある寺院は**聖寿寺**といい、北齊皇建元年(西暦 560 年)に建立され、当初は天龍寺と呼ばれて

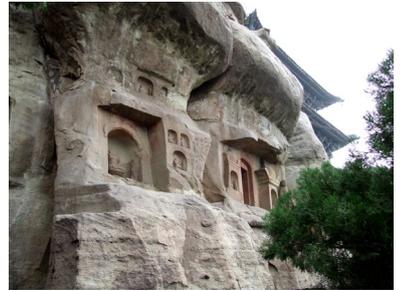
いましたが、宋代に現在の名前に改名された。



山の頂上の入り口



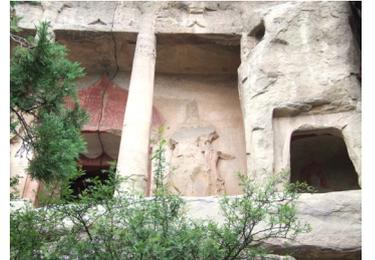
第9窟漫山閣岸壁に建てられたメインの伽藍。岩盤に石仏が彫られていますが？



観光客は山を降りながら見学



岩盤の石仏は殆どない 穴の中の石像は、お顔はありません。



第八窟お顔も手も在りません。何とひどい事ですか。



東峰の洞窟にまともな石像が、やっと在りました。



何もありません壁像までも？



聖壽寺の広い大きな境内



立派な山号額



立派な天王殿



四天王守っているのに、何故か石仏は殆どまともな物はありません。



初期四天王もお顔がありません。(盗まれた?)



大きな大雄客殿



本堂には釈迦像



釈迦像脇には羅漢たちが・



とっても大きく立派な鐘楼に、大きな吊鐘



関野貞氏 天龍山石窟を発見したのが、建築史学者・関野貞である。

1918年(T7)、関野は中国史蹟探訪に赴く。それまでも、雲岡・龍門・鞏県石窟などを訪れたことはあったが、今回は約半年にわたって雲崗から南下、太原、洛陽、天津、上海、南京、寧波方面の古寺を調査するなどの大旅行であった。

関野貞氏は、収集のため買い漁る側のモラルをさておいて、石仏破壊をすべて中国人自身の問題に帰しているが、これは如何なものであろうか。

1913年、パリで龍門石窟から引き剥がされた仏像の優品の展示を観たウォーナーは、後援者フーリアにこのように報告している。「ヨーロッパのディーラーが龍門の写真集に印をつけて、それを中国にいるエージェントに送る。そして彼らが石工を連れて龍門へ行き、希望の品を切り出すということである。」

龍門石窟を見学中にガイドマンから聞きました、口を揃えて『これはひどい』話しによると日本の東京国立博物館にも中国の切り取られた顔だけの石仏が幾多も在るそうです。

ここで、龍門石窟の盗鑿、破壊についてみてみたい。関野貞氏の話によると1918年(T7)龍門の地を訪れ、1906年(M39)に初めて龍門石窟を訪れた時に全て完好だった仏像群が、大きく破壊されているのを目の当たりにし、このように記している。「而るに、支那人にはこの世界の大遺跡を保存する心が無く、民国三年(1914)頃より洞窟に彫刻してある多くの仏像の頭などを取れるだけ取ってみな外国人に売ってしまい、今はほとんど完全のものはひとつも無いといってよい位です。幾千百年の間無事で来た仏像の頸を取って売ってしまうとは実に呆れた国民といわねばならないのであります」龍門石窟は、その頃一気に破壊され海外流出したらしい。



関野 貞



菩薩坐像頭部(ぼさつぎぞうとうぶ)(盗品)

天龍山石窟(てんりゅうざんせつくつ)唐時代 7~8世紀石造(砂岩)1個高35.0cm 中国・山西省の、隋から唐にかけて開鑿(かいさく)された天龍山石窟の第21窟北壁を飾る菩薩坐像の頭部。頭髮は高く結っており、その前面に

宝珠をあしらった髪飾りをつける。頬から顎にかけての肉付けはふくよかで、やわらかな量感すら感じさせる。半円形の長い眉や切れ長の眼、中央と両端をくぼませた唇が、堂々とした菩薩の相貌をかたちづくる。天龍山石窟の唐代彫刻を代表する作例である。でも、何も意味なさない。

根津美術館・東京国立博物館・大阪歴史博物館には、中国の石窟、主に、天龍山石窟・雲岡石窟・九龍壁などから盗掘された、石仏の頭など幾多にわたる物が、展示されているとの事ですが、はたして本来の姿で在るでしょうか？あくまでも盗品であり、盗品であるものの学問が何を意味するのでしょうか？それも仏教の教えでしょうか？そんな教えが、お釈迦様の本来の教えですか？お釈迦様は嘆き悲しんでいるのではないか？本来あるべき所にあつてこそ、その物の意味があり、教えがあるのではなかろうか……

日本仏教は、歴代の中国仏教があつての仏教であり、日本人の師である。その師の元へ直ちに、あるべき所に返還すべきだと思います。此の事も、世界平和及び日中友好にもつながる懸け橋である。お願致します即座に中国へお還してください。

晋祠：太原市街から南西 25 キロの場所に位置。晋国の始祖・唐叔虞を祀る祖廟。春秋時代の雄、晋は、紀元前 11 世紀、周の武王の子唐叔虞が、ここに封じられた事に起源を発している。その功績を称えて、北魏時代に建てられた祠が晋祠。現在では小さな祠よりも、緑の木々と清らかな水が織りなす 10ha もの庭園の美しさが有名だ。水の少ない、山西省で貴重な風景を形作っている北魏代に創建され、現在敷地内は広大な園林になっている。唐叔虞の母を祀った聖母殿は北宋時代を代表する建築物であり、殿内の表情豊かな彩色侍女像も有名。

太原で最も有名な文化財。晋祠の創建ははっきりしておらず、周の武王の次男で晋国の王となった姫虞が建てたと言われており、唐叔虞祠とも言う。晋祠の中で現存する最も古い建物は聖母殿で、北宋天聖年間（1023～1032）の創建言われ、その柱の龍の彫刻など建物自体も芸術的に価値がある。敷地内には千年以上の樹齢を持つ臥龍周柏などがあり歴史を感じさせてくれる。

建物内には壁画などもある。晋祠にはその他にも難老、善利と呼ばれる 2 つの泉があり、難老の水は清く、絶えず沸き出でて晋水の源流となっている。また関帝廟などの建物などがあり見所は多い。

聖母殿内には塑像が 43 尊あり、内訳は神龕に主像聖母 1 尊、宦官 5 尊、女官 4 尊、侍女 33 尊。神龕内に追加された 2 つの像以外は全て宋代のものが現存している。

晋祠の聖母殿は武王の後、太公望の娘で姫虞の母である邑姜を祭っている。

晋祠には「金人台」と呼ばれる台があり、4 体の古代武士の鉄像がある。このうち 1 体は宋代の鑄造だが、今も錆一つなく、輝きを失っていない。

聖母殿の前には「魚沼飛梁」という十字形の橋がある。これは中国古代では唯一の十字形の橋である



入り口の門



山門奥が本殿



魚沼飛梁という十字形の橋と聖母殿



聖母殿回廊本の柱には見事な龍が登っています。



本殿を守る四天王



唐叔虞の母の像



聖母殿内には塑像が43尊



広い境内には至る所に銅像



古代武士の鉄像が



千年以上の樹齢を持つ臥龍周柏



臥龍周柏



一番上から見た臥龍周柏



晋陽第一泉と書かれています。



難老泉と呼ばれる2つの泉の一つ



豪華な鐘楼



豪華な鼓楼